

Title	中国史研究における実地調査の新たな展開： 清末民国期を中心として： 太田出・佐藤仁史編『太湖流域社会の歴史学的研究：地方文献と現地調査からのアプローチ』（汲古書院、二〇〇七年一月）及び佐藤仁史・太田出・稲田清一・呉滔編『中国農村の信仰と生活-太湖流域社会史口述記録集』（汲古書院、二〇〇八年二月）の出版に寄せて
Sub Title	New research on local documents and field work in the study of Chinese history : especially regarding late Qing and Republican China
Author	森, 正夫(Mori, Masao)
Publisher	三田史学会
Publication year	2009
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.78, No.1/2 (2009. 6) ,p.171- 199
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学会動向
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20090600-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国史研究における実地調査の新たな展開——清末民国期を中心として——

太田出・佐藤仁史編『太湖流域社会の歴史学的研究——地方文献と現地調査からのアプローチ』（汲古書院、二〇〇七年十一月）及び佐藤仁史・太田出・稲田清一・呉滔編『中国農村の信仰と生活——太湖流域社会史口述記録集』（汲古書院、二〇〇八年十二月）の出版に寄せて

森 正 夫

はじめに

二〇〇四年度から二〇〇六年度の三年間に実施された太田出氏を代表者とする科学研究費による研究「清末民国期、江南デルタ市鎮社会の構造的変動の基礎的研究」の成果が一昨年から昨年にかけて相次いで汲古書院から出版された。

太田出・佐藤仁史編『太湖流域社会の歴史学的研究——地方文献と現地調査からのアプローチ』（二〇〇七年十一月）及び佐藤仁史・太田出・稲田清一・呉滔編『中国農村の信仰と生活——太湖流域社会史口述記録集』（二〇〇八年十二月）である。

本稿は、そのうち、『太湖流域社会の歴史学的研究——地方文献と現地調査からのアプローチ』（以下『太湖

流域社会」と略称)に重点を置きながら、緊密に関連する『中国農村の信仰と生活―太湖流域社会史口述記録集』(以下、『信仰と生活』と略称)にも必要な言及を行い、実態調査に基づく本共同研究の学問的意義を検討する。

なお、「太湖流域」とは、当該科研究費による調査に従事し、二つの著作の双方あるはいずれかの執筆を担当した六名の研究者または同行者たちが訪問した江蘇省呉江市、蘇州市、常熟市、崑山市、上海市青浦区・金山区、浙江省湖州市・嘉興市及び嘉善県の各市・県・区のうち、メンバーの関心がとくに集中した江蘇省呉江市、上海市青浦区及び浙江省嘉善県一帯である。ここは、太湖東岸に位置し、二〇〇六年成立の汾湖開發区を囲んでその西方・東方・南方に展開する地域であり、開發の波にさらされつつあるが、なおも多数の湖沼やクリークが分布している水郷地帯である。

さて、これら二つの著作は、現代中国の現在と将来に深い関心を寄せながら、宋代以後の、とりわけ明清時代以後の中国社会の歴史の研究に従事してきた一人であり、今を去る約二〇年前、広い意味でテーマを共有する共同研究に従事した経験をもつ私にとって、一言では表現し

尽くせない大きな感銘を与えてくれた。

一九八七年から九一年にかけ、当時大阪大学文学部に在籍した濱島敦俊氏は同学部の片山剛及び高橋正両氏とともに、「華中南デルタ開發史の研究」を進め、その成果を、一九九四年『華中・南デルタ農村実地調査報告書』という大部の報告書として刊行した。⁽¹⁾当時、名古屋大学文学部の教員であった私は、濱島氏らと連絡を取り合いながら、一九八八・八九年の両年度にわたって同大学文学部石原潤・教養部津田芳郎ら五氏とともに、「江南デルタの中小都市―市鎮の社会経済構造に関する歴史学的地理学的研究」を行い、研究の内容を、一九九二年『江南デルタ市鎮研究』として刊行した。⁽²⁾実は、太田出氏は、科学研究費による上記研究の第二年目に当たる二〇〇五年に、「中国地域史研究とフィールドワーク―近年における江南デルタ調査の成果と意義―」を、佐藤仁史氏は「地方新聞が描く地域社会、描かない地域社会―一九二〇年代、呉江県下の市鎮の新聞と新南社―」を、ともに『歴史評論』誌上で発表し、⁽³⁾濱島氏らと私たちによる二つの共同研究についての見解を述べており、ここでこれ以上紙幅を費やすことは避けねばならない。ただ、約二〇年の歳月を挟んで行われた太田・佐藤両氏らのこ

のたびの共同研究と濱島氏ら及び私たちの共同研究は、ともにフィールドワークを方法の中心に据え、江南デルタを対象として内包する作業である。私は、こうした対象と方法との共通性故に、近刊の両書に結実した太田出・佐藤仁史両氏らをはじめとする共同研究が他ならぬフィールドワークとしてもつところの圧倒的迫力にとりわけ大きな感銘を受けたのである。ただ、この迫力の具体的中味をお伝えするためには、『太湖流域社会』の紹介を行うとともに、『信仰と生活』の内容にも言及しなければならない。

一 文献調査と聴取調査

1 文献調査

『太湖流域社会』編者の一人、太田出の序「太湖流域社会調査の概要と方法」の「本書における問題関心と地方文献」によれば、『太湖流域社会』『信仰と生活』両成果を結実させた編者らの研究グループは、「明清時代から清末民国期へと至る太湖流域社会の連続と断絶の両面を考え」、かつこれまでの「清末民国期の江南デルタ研究は、近代上海という都市史研究に偏向しており、市鎮・周辺農村など後背地まで十分には及んでいない」状

学界動向…中国史研究における実地調査の新たな展開

況を克服するため、従来用いられてきた清代—民国期編纂の郷鎮志ではなく、「これとは異なる可能性を秘めた史料」としての『『地方文献』に徹底してこだわってみる』立場を取った。太田の序に寄れば、本書での「地方文献」とは「地方新聞、地方檔案、郷土史料」を指している。太田は又、「本書『太湖流域社会』はあくまで地方文献の博搜、地方文献の新たな可能性の発見に重点を置いている。」と述べる。

地方新聞とは、清末民国期に刊行された新聞のうち、申報や大公報など既に多くの研究者によって利用されてきた全国紙ではなく、特に清末民国期に県ないし市鎮レベルで編纂・発行された新聞を指し、グループの調査の結果、その非常に多くが各地の檔案館や図書館に所蔵されていることが明らかになった。

地方檔案とは、各種行財政統計、村落分布図、保甲冊籍、地籍図冊、私塾調査票、漁会入会登記簿、商会（工商聯）関係史料、囲墾養魚関係史料、廟会関係史料など、多種多様にわたり、各地の檔案館に所蔵されている。

郷土史料とは、民間に私蔵された族譜（家譜）及び宝卷などの文字史料であるが、ここでの宝卷とは木刻本・石印本・鉛印本のような印刷されたものでない抄本とし

てのそれであり、さらに宝巻を宣唱する宣巻芸人の上演活動の記録である「生意表」も含まれる。宝巻や「生意表」は宣巻芸人との接触を通じて閲覧が可能となった。

大切なのは、本書で用いられている「地方文献」は、「地方新聞、地方檔案、郷土史料」の三種に止まるものではないことである。すなわち、主として一九九〇年代以降に刊行された新編地方志（県志・鎮志・專業志等）があり、本書で公開された研究成果にとって決定的とも言える役割を果たしていることを付言しておかねばならない。

太田の序には、続いて「調査対象地の選定」の項があり、その（１）「地方文献所蔵機関」には、研究グループの調査は、まず第一に汾湖地域及び周辺の県・市・区の檔案館・図書館で実施されたことが記されている。また、第二に、研究グループが、県・鎮政府地方志辦公室及び社区居民委員会文化站といった基層行政機関の史料編纂室で調査を行ったこと、新編地方志は、必ずしも商業ルートに乗っていないので、これらの機関で入手し得る場合の多いことが記されている。また第三として石刻碑文調査のため、それらの集中保存されている蘇州市博物館及び常熟市碑刻博物館の他に、寺廟を訪問したこと

が記されている。

このように、研究グループの調査対象は、第一義的には地方文献であり、上記（１）で、閲覧・複写・撮影できた二四の檔案館・図書館名が列挙される。別に、『太湖流域社会』には第三部地方文献情報篇が置かれ、１「地方文献解題」、２「檔案館・図書館情報」において委曲を尽くした説明がある。２については、むすびで改めて紹介する。

2 聴取調査

しかしながら、『太湖流域社会』の方法的立場に関する太田の序の叙述で、強い印象を受けるのは、現地調査（フィールドワーク）である。「調査対象地の選定」の項（２）現地調査（フィールドワーク）では、「期間内に行われた現地調査（フィールドワーク）——景観調査だけでなく主に聴取（ヒアリング）調査——は来るべき機会に備えての準備段階に過ぎない。しかし聴取を進める過程で興味深い様々な情報を入手することができた。そのため本書では聴取記録の一部をも利用した研究成果を発表することとした。」とされる。そして、翌年刊行された『信仰と生活』は、上述のように「太湖流域社会史口述

記録集」という副題が付され、全冊がテーマ別問題を付した聴取記録集となっている。

太田の序によれば、調査地の中心は、費孝通（一九三九年）、福武直（一九四六年）、林惠海（一九五三年）、劉大鈞（一九三九年）などの比較対象となりうる優れた先行研究⁽⁴⁾が、当該及び周辺地域について存在している呉江市であり、市鎮を含む同市農村部の延べ約一五〇人余に及ぶ聴取対象者は、鄉村統治関係者（書記・会計・婦女主任、保長・甲長・図正）、土地改革・互助組関係者（農会幹部・分田小組組長・互助組組長）、老農民（雇農・貧農・中農・富農）、老漁民（船上生活者・漁業村幹部）、米行・魚行・絲綢行関係者、私塾塾師、宣卷芸人、廟会組織人、村廟管理人（仏娘）、天主教神父など多岐にわたっている。

『太湖流域社会』や『信仰と生活』所載の成果と関わる聴取の一端は、太田の序の挙例によれば、以下の通りである。（１）太田出は、呉江市北庫鎮大長浜村楊申亮氏の協力の下に、呉江市蘆墟鎮の莊家圩廟（劉王廟）、呉江市盛沢鎮近傍の浙江省嘉興市王江涇鎮民主村（劉王廟村）、上海市青浦区金沢鎮の楊震廟、蘇州市吳県上方山の上方山老爺廟の各廟会に参集する漁民を廟会及びそ

の現住地である漁業村で聴取した。（２）山本英史は、青浦区における調査の過程で偶然に知り合った鄉村統治に関わる民国期の「図正」を聴取した。（３）陳来幸は、盛沢鎮の郷土史家・周德華氏の紹介で、同業公会・工商聯関係者から、民国期に現在の盛沢鎮絲綢業の変遷について聴取した。（４）稲田清一は、青浦区檔案館で相互に隣接する一市鎮・一村落の詳細な地籍冊・地籍図を入力し、現地で、当時と現在の宅地・耕地を比較するとともに、史料中に登場する人物に直接面会し、緻密な聴取をした。（５）佐藤仁史は、呉江市蘆墟鎮の郷土史家張舫瀾氏、前述楊申亮氏の父君楊前方氏の紹介を通じて、幾人かの宣卷芸人から聴取し、そのうちの一人である朱火生氏に対する長時間の密着取材を行って前掲の諸史料の閲覽と複製が可能となった。

これらの文献調査と聴取調査を合わせた調査活動は、『太湖流域社会』一七―三三頁の調査日程表による筆者の試算によれば、二〇〇四年八月二八日に第一回調査が開始されて以来、二〇〇七年三月二六日に第一〇回調査が終了するまで、合計一六一日を要している。『太湖流域社会』及び『信仰と生活』の二つの成果に結実した文献調査と聴取調査はこのように三ヶ年にわたる延べ五ヶ

月以上の調査活動―広義のフィールドワークの所産なのである。

二 文献調査の成果

―『太湖流域社会』第一部地方文献篇を中心に―

第一部地方文献篇を構成する五篇は、それぞれが領域を異にする地方文献を対象とした研究であるため、内容の把握にとつては個別的な紹介が必要である。各篇ごとに付した簡単な批評の目的の一つは内容の把握に資することにある。

1 山本英史「清末民国期における郷村役の実態と地方

文献―蘇州府を中心とする史料紹介―

本研究は、郷村基層社会において徴税と治安を管理した郷村役に焦点を当て、一九八〇年代後半以降の中国において出現した地方文献閲覧の新たな環境の下で、清末・民国期における郷村基層社会研究の可能性を探ることを企図している。

山本は、まず、清代中期一八世紀乾隆期に遡り、その後一九世紀後半以降の清末に至る時期について、現蘇州市・呉江市を含む広汎な地域を包括する行政区であった

蘇州府の府志及び府下の各県志における郷村役に関する記述を整理する。その結果、郷村役に関する情報を記載しない地方志が多くあり、記載があったとしても記事が断片的あるいは簡略に過ぎて郷村役の具体的存在形態が把握し難く、また各地域に共通した特徴があると予測されるものの、これらの記事だけでは相互の関係の理解が困難であるとする。山本によれば、乾隆以降の地方志の記述のこのような特徴は、清初の改革によって徭役の弊害がなくなり、以後の郷村役は徭役的な性質が薄らいで自ら志願して就く業務になったからであり、その中で、地方志の執筆に当たった地元知識人たちの郷役に対する関心が稀薄になるのも当然であった。

山本は、次に、蘇州の地方紙―地方新聞である『蘇州明報』と『呉県晶報』を活用して清末以降、在地の徴税機構の維持を担ったのが郷村役としての経造であったことを明らかにした近年の高島航の業績に注目しつつ、一九二九（民国一八）年七月二一日及び一九三一（民国二〇）年二月二五日の『蘇州明報』、さらに一九二二（民国一一）年一二月一日及び同年一二月一〇日の『常熟日报』（旧蘇州府常熟県）の記事を改めて詳細に分析する。山本は、郷村役として徴税を担った存在が経造であ

ったことを確認するとともに、警察業務を担ったものとして地保という存在があつたことを新たに示し、かつ高島の見解とは異なる点として、一九二二年二月四日の『常熱日日報』により、経造と地保とがともに郷村役として兼務される場合のあつたことを指摘する。

山本は、他方で、今回、民国期の土地所有者として聴取調査の対象者となつた清代の松江府青浦県（現青浦区）広富林鎮の住民・湯伯泉氏及び同県王家浜村の住民・徐妙堯氏の聴取調査に参加し、湯氏は一九四五年以来、図正として、徐氏の父親は一九二七（民国一六）年頃から一九四九年まで、保正として、ともに地域の土地情報の管理と徴税に当たり、湯氏は革命後も三年間、土地の管理を続けていたことを確認した。

山本は、あわせて、常熟市檔案館における一九四七（民国三六）年七月七日付けの五枚の文書中の一枚と用直鎮保聖寺に保存されている一八七〇（同治九）年の旧元和県及び一八七三（同治一二）年の旧常熟県の石碑からいづれも徴税を担当する経造の存在が確認されたことを明らかにし、さらに新編地方志の活用によって新たな史料が発見される可能性についても言及する。

誤解を恐れずに敢えて概括的に言えば、山本は、郷村

役に対象をしぼり、清代中期から清末民国期に至る江南デルタの郷村―すなわち農村における地域社会の行政構造には基本的に変わっていない側面がある、という興味深い見通しを示した。もしそうであるならば、今後この見通しをより確実にする、及びその意味がどこにあるかについての見解を示すことを希望したい。

2 陳来幸「清末民初期江南地域におけるシルク業界の再編と商業組織」

陳は、第一に、一九世紀末から二〇世紀初頭に至る国際シルク市場（製絲・絹織物業）における江南地域、とくに市鎮の位置付けを明確にする、第二に、伝統的な同業組織が国際的に進行する技術革新と市場競争に対応するため、組織改革による分化・統合・連携をどのように行ったかを把握し、第三に、民間の行会、商会あるいは市民公社と行政組織（県署、警察、稅務当局）との関連性を明確にすることを企図している。

本研究の特徴は、日中の層の厚い先行研究を前提としながらも、新たに入手した地方文献を積極的に駆使していることである。ここでの地方文献とはおよそ四種類にわたる。第一は、わが国では入手困難な地元の優れた郷

土史文献の活用である。とりわけ、製絲・絹織物業の生産・交易拠点の一つである盛沢鎮在住の郷土史家・周徳華氏が主筆をつとめた、呉江絲綢工業公司編『呉江絲綢誌』(江蘇古籍出版社、一九九二年)が用いられている。呉江工会誌編纂委員会編『呉江工会誌』(江蘇人民出版社、一九九五年)もその一つである。第二は、地方新聞である。たとえば、地元紙の『呉江』は、呉江県城(松陵鎮)出身の錢慈英とともに、上海で呉江旅滬同郷会を設立し、また呉江会館を建設した震沢鎮出身の施子英の死を悼み、功績を頌える記事を詳しく掲載している。

『蘇州明報』は、一九二六(民国一五)年八月二一日、盛沢鎮の染色など絲織関連職人には明代初期以来の多数の紹興移民が含まれることなどの記事を載せ、また、同年六月一六日付などで蘇州の総商会と同業公所と呉県政府・警察との関係についての記事を載せている。第三は、檔案館編纂の既刊の檔案資料集である。たとえば、蘇州市檔案館編『蘇州絲綢檔案匯編』(上)(江蘇古籍出版社、一九九五年)であり、そこには、「蘇州紗緞業公會會員錄」(一九二九年二月)、「蘇城絲業公所章程」(一九二一年)、「嚴鴻魁等為請轉報現売機業組織公所事致蘇總商會呈」(一九一八年八月一七日)などが収められている。

また華中師範大學歴史研究所・蘇州檔案館合編『蘇州商会檔案叢編』(一九〇五—一九二一)第一輯(華中師範大學出版社、一九九一年)には、「職員銜名清冊」(一九〇六年)、「第二期職員銜名清冊」(一九〇七年)などが収録されている。第四は、地元檔案館所蔵の檔案の現物である。たとえば、蘇州市檔案館蘇州總商会ファイルには「仁川中華總商会致蘇州總商會函」(一九二四年九月一八日付)、「本県(蘇州)と同義で用いられている呉県)商会沿革概略」(一九四六年頃作成と推定)などが収められている。

陳は、全篇を通じ、清末から民国初年にかけて、蘇州だけでなく、盛沢鎮・震沢鎮において公所・会館・商会の顕著な発展があったことを着実にあとづけている。また、日本の朝鮮併合にともない、日本の高関税の適用によって朝鮮における蘇州シルクの販売市場が苦況に立つに至った経緯の紹介も興味深い。それでは、清末民国期における蘇州及び呉江地域におけるシルク業の展開は、今日のこれらの地域において「年々発展を遂げている」シルク業の生産と流通にとっていかなる意味をもつものであったのか。このことを明らかにする上での方法的見通しの提示を要望しておきたい。

3 佐藤仁史「清末民国期の近代教育導入にみる市鎮と農村——江蘇省吳江県を事例に——」

明清期に形成された地域社会の構造や地方公事の運営方式、及び村落——市鎮——県城間の関係が、清末以降の国民国家や行政機構の整備・浸透によってどのように変容したのか。佐藤は、今日の江南市鎮社会の研究においてはこの問題に関わる多くの検討課題が依然として残されている、とする。郷紳が主導する県社会、生員・監生層が担う市鎮社会、富農を中心とする「社」の世界——農村社会。濱島敦俊が提示する明末以降の江南社会のこの三層構造は、教育史の分野では、近代教育制度の導入下に出現した市鎮と農村部との間における教育の非連続性や分断的状况によって変容したのか否か。変容したとしてその過程の内実と動態はいかなるものか。佐藤仁史は、冒頭で、本研究テーマの担う課題をこのように掲げる。あわせて、具体的問題の分析に用いる対象地・吳江県の地方文献には、第一に、自己主張の媒体・手段としての新聞群——『新盛沢』、『盛沢』、『盛涇』、『新黎里』など——があり、第二に、『吳江県教育状況』（民国初年）、『一九五〇年各小学私塾概況調査表』などをはじめとする檔案群があるとし、それらを用いながら以下の三項の考察

を行う。

「1」「清末民初における近代学校設立にみる市鎮と農村」によれば、民国初年の吳江県においては、県立高等小学校区は市鎮のうちの大鎮に、初等小学校区は市鎮のうちの小鎮に設置され、農村での就学者は初等小学校付近の地主・富農層の子弟に限られており、一般農民には殆ど縁がなかった。

「2」「一九二〇年代の平民教育と市鎮社会——盛沢鎮を中心に——」によれば、一九二〇年代の吳江県下及び周辺の市鎮では新文化の普及を旗幟とする地方新聞が発行された。その発行人・主要執筆者の多くは盛沢鎮に設置された県立第三小学校の校友であり、教育界を活動の主要な立脚点とする知識人としての性格を濃厚にもつエリート層であった。彼らは新聞『盛沢』、『盛涇』及び『新盛沢』などを発行して世論形成を図りつつ、地元である吳江県第三区の教育会と連携して平民教育の普及につとめ、「文明化」を志向した。このように、一九二〇年代の市鎮は、大鎮を中心として近代教育を通じて「文明化」が及ぶ最末端となり、それが及ばない農村との対比が際立っていた。

「3」「私塾からみる清末民国期の農村教育」によれば、

既往の研究によって用いられてこなかった解放直後の上記私塾調査、及び佐藤が呉江県下の農村で行った聴取調査によれば、近代教育の導入によって問題視され、改良や取締の対象と見なされるようになった私塾は、民国期を通じて存在し続けた。「五経」の前段階まで学び終わることが現在の高校卒業に比定されるという老農民からの聴取結果があるように、私塾とは、当時の一般農民にとっては、近代教育による社会上昇のためではなく、現実にとり得る様々な生存戦略の選択肢の一つであった。

佐藤は、結論的に、濱島という明末以来の江南社会の上記三層構造は、言語文化の面からみても科挙文化に包摂されつつ清末民国期に至るまで存続するが、近代教育による新たな知識人層の登場とともに、市鎮社会は「文明化」世界の末端となり、それが及ばない農村社会との対比が顕著になった、と述べる。

清末民国期の近代教育導入をめぐる市鎮・農村に対する佐藤の分析方法は江南のみならず、少なくとも同時期の華中・南の少なからぬ地域にも適用し得る一般性をも持つものであり、その意味からも意義が大きい。それでは、一九四九年以前、私塾が個々の農民の個別的生存戦略としての役割を果たしていた農村社会においては、そ

の後、多くの農民が共有することのできる知的活力培養の方向性は、どのようにして見出されるに至るのであるうか。かかる課題が今日的にもなお存在し、当面、江南デルタにおける検証を待っているように思われる。

4 太田出「民国期の青浦県老宅鎮社会と太湖流域漁民

——『郷鎮戸口調査表』の分析を中心に——

清初、一七世紀後半の江南デルタの太湖水周辺及び沿海地区の市鎮に清朝正規軍によって置かれた駐在所―防禦拠点としての汎は犯罪の潜在的对象として漁民を想定していた。その背景には水上で流動性の高い非定住の漁民に対する漠然とした警戒（蔑視）感が存在していた可能性がある。太田は、自己の既往の研究において得たこのような認識を踏まえ、従来実施されて来なかった太湖流域漁民史研究に取組む必要性を提起し、広く大陸及び日本の中国・アジア非定住船上生活漁民研究史の成果の検証の上に立って、太湖流域漁民の実態把握から作業を開始する。

基本資料は、「〔青浦県〕徐涇鎮第四保・第五保戸口調査表」（民国三六―一九四七年六月）であり。この調査の前提となった青浦県の保甲制度は民国二三年（一九

三四)以降、順次整備されていった。当該の「戸口調査表」は上海市青浦区檔案館が所蔵している。保甲制度に関する青浦県政府の布告などの文書は同檔案館所蔵の『青浦民衆』(国民党青浦県支部発行と推定:筆者)に掲載されている。一九四九年の中国革命以後、保甲制度に代わって実施された漁民管理や漁業政策については、『青浦県志』及び『徐涇志』など、一九九〇年代以後に刊行された新編地方志が用いられている。また、青浦県の西方に位置する吳江市北庫鎮大長浜村及び八坼鎮漁業村在住の漁民二氏からの聴取調査の結果も漁民と農民との関係を理解する上で参考とされている。

民国三六年(一九四七)、南京国民政府は、国民国家の形成と共産党との内戦に備えることを目的として、各保の保長辦公処を中心に詳細な戸口調査を実施した。その際作成された上述の「(青浦県)徐涇鎮第四保・第五保戸口調査票」によれば、二七二戸からなる第五保は徐涇鎮東南に位置する老宅鎮とその周辺農村からなり、その内部に四五%に当たる一二二戸の漁民を含んでいた。太田は、当該の「戸口調査表」において、第五保第一〇一七甲に位置づけられている老宅鎮漁民社会のもつ特徴を次のように分析している。ちなみに、一つの甲は一

二一七戸から成っている。

一九四九年以前、清末民国期の太湖流域漁民は基本的に非定住の船上生活を行い、固定した陸上生活を営まず、主に「捕魚」を生業としていた。民国期には、政府の管理上の必要から、家屋ではなく船を単位として漁民の保甲が編成され、漁民の船は市鎮の碼頭(埠頭)に集中的に停泊させられていた。水上の民である漁民と陸上の民である農民・鎮民は、保甲制度の基礎単位である甲のレベルでは明確に区別されていた。

各甲は太湖流域の青浦及び長江南岸の嘉定・太倉、さらに長江以北の興化などの本籍地別に、一・二の同族を中核にして編成され、一戸を一世帯とみなすと平均四・六八人からなり、女性も労働力と認識されていた。

当該の「戸口調査票」によれば、老宅鎮は、三店の魚行と呼ばれる水産業者など水産業関係が重要な位置を占め、他におよそ二四種の商工業者を擁する小規模の集鎮¹¹都市的集落であった。南京国民政府による保甲制度は漁行―漁民関係に依拠しつつ、それを利用・保障する方式で編成されていた。しかし、太田は、鎮の地域社会では、鎮民・農民と漁民は同じ空間にありながら、社会関係を共有せず、なにがしかの「共同性」¹²コモンズを

構築することもなかった、と判断している。

太田は、本篇の作業を通じて、民国期における「太湖流域漁民の具体像」の多様な側面をきめ細かく描き出し、この時期に止まらず、従来誰もが把握していなかった漁民社会の存在形態を、はじめてわれわれに提供した。ただ、地域社会における漁民の位置付けについては、その農民との関係が論証の可能性を孕んだ重要な仮説の域に止まっている。また老宅鎮における鎮民の職業別構成は明らかにされたが、鎮民と農民との関係については問題設定自体の説明が必要である。太湖漁民社会の現地に足を踏み入れたものが何らかの形で直覚するこれらの課題の解決が期待される。

5 稲田清一「一九四〇年代末、江蘇省青浦県における

地籍台帳と地籍公布図」

日中戦争を挟んで一九三〇年代と一九四〇年代に、南京国民政府により、自作農創設を最終目標に掲げ、土地所有権を確定して税収を確保するため、近代的な測量をとまなう土地整理事業が企図された。日本の近年の研究はその行政・政策的側面を明らかにしてきたが、事業の展開過程で作成された原文書類―土地台帳や地籍図には

及んでいない。それらへの関心は日本の明清史研究における魚鱗図冊の調査・研究及び夏井春喜による清代康熙年間から民国四年（一九一五）に至る魚鱗図冊の調査に見られるのみであった。⁽⁷⁾ 稲田は、研究グループの一員として、二〇〇四年九月、青浦区檔案館において、青浦県佘山郷で一九四九年に作成されたと見られる地籍台帳と同郷広富林付近の地籍公布図（地籍図）を閲覧し、二〇〇六年八月、後述のように、両資料に記載されていた宅地所有者一名及び宅地所有者の子息一名などの聴取調査を行った。稲田は、これら両資料の概要の把握とそのうちの地籍公布図の幾つかの側面に対する分析を行っている。

佘山郷の地籍台帳には同郷の南部に当たる広富林鎮を含む地域の記載があり、他方、二枚の地籍公布図は広富林鎮とその西に接する張家村（行政村）を対象としている。両者にはいずれも一筆ごとの土地について正式地号（地番）、地目（土地の種類）、暫編（暫定）地号、所有者名、土地の面積が記載されており、しかも記載されている個々の情報の内容が一致している。このことから、地籍台帳と地籍公布図がいずれも一九四九年前半に製作され、これら一対の台帳と地図に依拠して、土地の所在

と所有権者を確定し、把握しようとする政策的意図に基づくものであることが明らかになった。

また、一方で、地籍台帳の「図幅号数」と地籍公布図の「原図番号」を突き合わせ、他方で、一九三四年の公布図や戸地図の作成方法（『地政月刊』第二卷七期「江蘇省土地局全省土地測量隊分戸測量暫行簡則」所載）、一九三四年八月時点で測量当事者が作成した「青浦県全境図」（青浦区檔案館藏）及び一九二八―一九三六年の間の国民政府時期の土地整理事業の経緯（江蘇省地方志編纂委員会編『江蘇省志・土地管理志』。二〇〇〇年。江蘇人民出版社）などと総合的に分析を加えることにより、一九四九年作成の地籍台帳と地籍公布図は、日中戦争前の一九三〇年代の測量結果に基づく原図によることも明らかにになった。稲田は、国民政府をとりまく当時の大状況の中では、土地所有権の確定のみに重点が置かれたと判断している。

二〇〇六年八月、稲田が、両資料に記載されていた広富林鎮の宅地所有者周伯良氏と隣接する旧張家村の宅地所有者の子息徐妙発氏などから聴取したところによれば、両氏とも、現在居住している場所は、一九四九年当時の地籍公布図における宅地と同一の位置であり、さらに、

周伯良氏は同図記載の広富林の宅地所有者一一三名中九二名の姓名を、徐妙発氏は張家村の宅地所有者四四名中四三名の姓名を認識していた。稲田は、このことから、一九四九年の地籍調査は非常に精度の高いものであったことが判明する、としている。

一九四九年当時の当該地域における土地所有の現実のあり方について、稲田は「地図の精緻さのみに目を奪われるのは危険である」と指摘し、さまざまな問題点を挙げている。稲田は、すなわち、聴取した高齢の住民の記憶と一九四九年の調査結果との間には、たとえば、所有権者の姓名の不一致や所有面積の食い違いがあり、その中には一田両主慣行との関係を考慮すべきケースもあることを示唆しているが、土地利用のあり方については、幾つかの論点を提示している。

二枚の地籍公布図のうち、一方は広富林鎮という市鎮＝都市的集落を含む区域、他方は張家村という純農村区域のものである。広富林鎮の図には宅地が多く、南辺には宅地が密集して鎮の中心街区であったことを示す。張家村図には、聴取記録をも参照すれば二つの自然村が含まれており、宅地は筆数も面積も少なく、浜という突き当たりのあるクリークの周辺における集落形成を示し

ている。田地（水田）は、農村部である張家村図において圧倒的に高い割合を示し、短冊形の細長い形状をもち、いずれか一边が水路に臨むように整備されている。

また、家屋の前後にあり、宅地とセットで菜園あるいは作業場や家畜・家禽の飼育場に当てられたと見なされる仕地の筆数や面積の比率は、宅地所有名義者の場合に高く、居住者にとって生活の場に仕地をもつことはかなり一般的であったとみなされる。稲田は、筆者（森）がかつて青浦県朱家角鎮での一九八九・一九九二年の調査をもとに言及した「宅基地」⁸⁾のうち、家を建てるための敷地以外を指すケースが、ここでの仕地に相当すると述べ、大躍進時代に個別農家の経営を維持する手だてとなった自留地のもつ役割との相即性に注目する。稲田は、市鎮など中小都市に住む零細な非農業従事者の生計維持という観点からも、仕地をより長い歴史的展望の中で把握したいとする。

旧青浦県佘山郷を対象とし、国民政府の事業として一九四九年に作成された地籍台帳及び地籍公布図の発見とその内容の確認は、農村における土地の具体的存在形態を掘り起して民国期の土地所有研究の新たな側面を切り開いた。今後は、『太湖流域社会』収載の各論文で取組

まれている諸課題についてと同様に、一方では、民国期固有の特徴がさらに明らかにされるとともに、他方で、明清期から清末民国期を挟んで今日の中国に至る、まさに「より長い歴史的展望の中で」の掘下げのなされることが望まれる。

三 聴取調査の成果

―『太湖流域社会』第Ⅱ部フィールドワーク篇を中心に―
三篇からなる第Ⅱ部の冒頭に配置された太田自身の論文の「はじめに―聴取調査（ヒアリング）と歴史学」の冒頭において、太田は、二〇〇五年八月一日日払暁に呉江市の西方に当たる、浙江省湖州市放漾蕩の興華廟で行われた漁民の儀式への研究メンバーの参観活動―参与観察―を描写し、こうした参与観察の過程で得た現地の人々との友人関係を媒介としてこのたびの聴取調査が実現したことを確認して、その重要性を説いている。太田は「少なくとも社会史を標榜するならば、文献資料と聴取調査を組み合わせてこそ、より実態に近づいた歴史世界の構築が可能になるのではないか」と述べ、「かかる学問的立場に拠りながら」、太田は漁民、佐藤仁史は宣卷芸人、呉滔は農民を主として担当しつつ、聴取調査を

実施した、と記す。

フィールドワークは、私たち日本の歴史研究者の従来からの大まかな共通理解では、広く実地調査・現地調査一般を指し、必ずしも聴取調査のみに限定されたものではない。しかし、すでに見てきたように、本書では、あえてそのうちの地方文献の調査に基づく研究を第Ⅰ部・地方文献篇にまとめ、これとは別に、参与観察を媒介とする聴取調査（ヒアリング）をフィールドワークと呼んでいる。以下の三篇は、聴取調査（ヒアリング）としてのフィールドワークの所産である。なお、本共同研究における聴取調査（ヒアリング）としてのフィールドワークの方法については、佐藤仁史・太田出による専論が二〇〇八年に出されている⁽¹⁰⁾。

これら三篇は、それぞれが異なった対象者群の聴取調査からなる個性の強い研究であるため、第Ⅰ部の五篇について行つたと同様に一つ一つについての個別的な紹介が必要である。各篇ごとに付した簡単な所感も、やはり第Ⅰ部についてと同様、内容の把握に資することを目的の一つとする。

1 太田出「太湖流域漁民の「社」「会」とその共同性

学界動向…中国史研究における実地調査の新たな展開

―吳江市漁業村の聴取記録を手がりに―

第Ⅰ部地方文献篇所収の前掲論文「民国期の青浦県老宅鎮社会と太湖流域漁民―『郷鎮戸口調査表』の分析を中心に―」において、漁民が外部社会との間に明確な共同性をもっていなかったことを予測した太田は、保甲についての資料から漁民が同族・姻戚関係乃至同郷関係を紐帯として生活していたことは確認できるとしても、これらの内部に共同性を有していたかについては明かではないとして、信仰の側面からこの点の検討を企図する。

太田は、中国の研究者陳俊才が一九六〇～七〇年代以降、太湖流域漁民について実施してきた聴取調査に基づく研究「太湖漁民信仰習俗調査」(『中国民間文化』第5集、一九九二年)により、一九四九年以前の信仰の対象―神靈を整理し、これをふまえて、二〇〇四～二〇〇七年の吳江市各漁業村で聴取調査を行い、とくに蓮泗蕩劉王廟(嘉興市王江涇鎮)、莊家圩廟(吳江市蘆墟鎮)、楊爺廟(上海市青浦区金沢鎮)、上方山太太(蘇州市)の四廟は、吳江市の漁民が必ず焼香拜佛するところの最も重要な神靈であることを確認する。太田は、この内、上方山太太を除く三つの廟と浙江省湖州市石淙鎮の太君廟との四箇所について、漁民の信仰活動の実態を示す事物

―廟内の賛助名單(名簿)、匾額・柱、双龍船・太鼓、廟会参集時の旗幟、廟外の碑文・鼎を克明に調査し、詳細な表を作成する。あわせてそれぞれの神像の個性ある写真を提示する。その上で、漁民の団体のうち、旗幟等に社・会と記したケースに注目し、再度陳俊才の調査・研究を参照しつつ、一九四九年以前から活動してきた太湖興隆社徐家公門、嘉興南六房長生分会、平望北六房という三つの社・会の漁民に対する聴取を実施する。本篇の半ばを越える第二及び第三章は、これら三つの聴取の内容の紹介と説明に充当されている。

太田は、これらの聴取事例により、太湖流域漁民が一九四九年以前から社・会と呼ばれる組織を結成してきたことが明らかに、また、他にも多数の社・会の存在が確認され、現在でもこうした組織が漁民間に普遍的に見られることが判明した、とする。

これら社・会の性格は、現在では諸経費を共同負担しながら焼香・「出行」(神像の巡行)を行うなど信仰活動のみを目的としたものであり、漁民の主要な生産活動たる漁撈・養殖や他の経済的側面では「共同性」を有する活動を見出すことはできない。ほぼ純粹な信仰組織である。しかし、一九四九年以前には、顔役たる香頭が矛

盾・紛糾を解決する場合もあり、漁民間の秩序を維持する最末端の行政的な役割―特に治安面―を担っていた可能性も残る。以上が、社・会の存在形態についての太田のまとめである。

太田は、社・会の基盤については、斯波義信が主として華北農村を念頭に置きながら、社を「地縁的な宗教団体」と想定し、濱島敦俊が明末以降の江南デルタにおける社を「地縁的結合が基層組織となった集団」として捉えていることを確認する。その上で、太田は、太湖流域漁民の社・会はこれらと大きく異なっていたと考える。固定した土地・家屋を持たない漁民と固定した集落に居住して農地を耕作していた農民とは結合のあり方に相違があつて当然であり、一九六八年における漁業の社会主義的改革以降形成された現在の漁業村それ自体にも農村のような共同性を認めることはできない。現在の社・会のもつ地縁的な「共同性」は、共有され続けてきた蘇北(長江以北の江蘇省北部)から江南デルタへのかつての移住の記憶の共有に基づくものである。社・会の基盤について、太田はこれように総括している。太田は、内山雅生の整理する一九四九年以前の信仰組織における香頭についての研究史をふまえながら、蘇北以来の「共有

された記憶」を紐帯とする組織の存在が、漁民を在地社会から隔離させた状態のままに置いてきたのではないかと、外部社会との疎隔に関する自身の地方文献篇の論稿における問題提起への回答を試みる。

民国期から今日に至るまで継承されてきた漁民社会の内部における共同性及び漁民社会と外部社会との関係のもつ特質。地方文献篇とフィールドワーク篇との双方において太田の提示した根拠ある予測は、民国期から今日に至る中国社会自体のもつ共同性のあり方とも切り離し得ない側面をもつように思われる。更なる検討を望みたい。

2 佐藤仁史「一宣卷芸人の活動からみる太湖流域農村と民間信仰」

佐藤は、現代中国、とくに東南部における民俗文化の復興現象が太湖流域社会においても例外なく見られることから、民俗文化復興の背景、行事の内容及び一九四九年以前の「伝統中国期」との違いを分析する必要があると感じ、とくに江南民俗文化の特徴としての村廟における民間信仰の存在に注目した。濱島敦俊によって集約・体系化された従来の民間信仰研究が、近現代期における民間信仰

の変容に関する問題群になお及んでいない状況を踏まえ、佐藤は、更なる前進を期す。すなわち、佐藤は、江蘇省呉江市の農村部において活発に活動している一宣卷芸人との出会いを契機とし、この一宣卷芸人の活動を分析することを通じて、「伝統中国期」と対比しつつ、民間信仰と太湖周辺の農村との関係、民俗文化復興の態様及び農村における社会的統合の変容を考察する。

宣卷とは、宝卷の宣唱のことである。元明以来仏僧が教理を講釈するために編纂した宝卷を大衆に講釈宣唱したものを、清代に民間伝説や故事などを入れて芸能化した民間芸能の一種である。

清代中期の嘉慶一〇年（一八〇五）以後、民国期に至るまで、澤田瑞穂によって新宝卷時代と名付けられた時期の宝卷は、通俗倫理を説く勧善懲惡調の色彩が濃厚になり、小説や戯劇、弾詞、民間伝説などで知られた物語が宝卷化していった。このことは宣卷の芸能化・職業化の潮流と軌を一にしていた。宣卷は民国期に入ると、始まりに木魚を用いず、胡琴や蛇皮線、琵琶、揚琴、笛などの絲竹楽器を用いて曲を演奏する絲弦宣卷へと変貌を遂げた。

佐藤は、宝卷及び宣卷の民国期に至る変容過程を以上

のように記した後、中国革命前の民国末年、呉江県下で活躍し、改革開放後の再開期を担う弟子達を育てた芸人を第一世代と呼び、改革開放初期に活躍した芸人達を第二世代と呼んでいる。佐藤らの研究グループが調査を行った二〇〇四年九月から二〇〇七年三月の期間においては、第二世代の一部と、改革開放期に宣卷を学び、八〇年代以降に活動を展開した第三世代の芸人達とが芸能としての宣卷を継承し、活発に活動していた。佐藤と深い信交を結び、上演場面の参観や聴取調査を受け入れ、「生意表」と記された上演記録や所蔵する宝卷の抄本二〇種あまりの閲覧・撮影を快諾した朱火生氏（一九四八―）は、第一世代の呉仲和氏の弟子で第二世代に属する沈祥雲氏の弟子に当たり、すなわち上にいう第三世代である。

佐藤は、宣卷芸人朱火生氏の上演記録や数人の宣卷芸人及び幾つかの村落における聴取調査を参照しながら、現段階における民間信仰と太湖周辺の農村との関係、民俗文化復興の態様及び農村における社会的文化的統合の変容を総括している。幾つかの論点を選び、あわせて佐藤による具体的な調査内容を紹介したい。

朱火生氏の上演記録によれば、その活動空間は、一座

の運営の安定につれて呉江市東部を中心に蘇州市や嘉興市などにも拡大しているが、バイクで日帰りできる範囲である。上演地点は、本人の出身地域の人間関係、協力者とその紹介した顧客、助手のもつ人間関係、仏娘（霊験ある女性の宗教職能者）や著名な廟の管理人との関係など、具体的な人間関係の中での評判に依存している。

市鎮と農村との関係については、一九四九年の中国革命以前に市鎮の茶館で活動する牌話という仲介人が担っていた機能は、近年では名刺や携帯電話によって代替されていることが指摘されている。もともと農村部の住民の嗜好との親和性が高く、市鎮での上演は少なかった上、農村部の娯楽に対して市鎮の茶館等が果たしていた機能が消失しているため、農村での宣卷と市鎮での娯楽とのギャップは深くなっている。

宣卷の上演場面は商売繁盛などの願掛け・願ほどきが圧倒的に多く、廟会・仏会などの年中行事における集団活動がこれに次ぎ、人生儀礼、とくに冠婚葬祭などは一九四九年以前に比べて減少の傾向にある。

宣卷の上演場面は、上演される民間信仰の対象としての神霊の側面から見ると、驅蝗神・施米神として知られ、江南地方で特に信仰を集める劉猛將軍が最も多く、老婦

女と関わる観音菩薩や仏たちが次ぎ、商売関連の財神や閻聖帝君が続く。

信仰圏としては、自然村を主とする範囲、村を越えて近隣の地域を広く含む範囲、広域信仰圏の三つがあるが、一九四九年以前に存在した村の土地廟と鎮の城隍廟などの上位廟との関係や近隣の村落との関係は絶無になっている。

宣卷芸人を呼ぶ側では、村落の共同行事としては、ほぼ全村民による釀金で実施されている点においてかつての「共同性」の片鱗を残存させてはいるものの、あくまでも任意の活動に変容している。仏娘が呼ぶ場合はその営利活動としての性質が強い。

一宣卷芸人である朱火生氏の上演空間に即して太湖周辺の娯楽圏や信仰圏の実態を分析すると、少なくとも娯楽圏や信仰圏については、農村と市鎮との乖離が際立っているというのが、佐藤の重要な総括である。

娯楽や信仰の領域において、かつて市鎮とその郷脚とさえ称された農村との間に、今日認められる顕著な乖離は、いつ、どのように、そして何故に生じたのか。民俗文化自体は、農業・商業において一九五〇～六〇年代に進められた社会主義的改造期の中断を経て、一九八〇年

代から改革開放政策とともに復興してきたとされる。とすれば、娯楽・信仰における農村と市鎮との乖離の過程と契機を、農村と市鎮との社会的経済的関係の現状をもふまえて、総合的に考察することが求められている。あくまでも佐藤の今回の作業を前提として設定し得る今後の課題ではあるが。

3 吳涇「莊家圩廟と村落社会」

吳涇は、共同体的信仰構造が江南デルタの社会経済史的過程に適応しつつ変動したことを明らかにした一九八〇年代以降の濱島敦俊の業績を高く評価し、さらに、濱島は「史料上の制約の中で、推論によりつつ論理を組み立てざるを得なかったが、『土神』にまつわる民間故事・靈異説話の分析を通して地方社会の変遷を透視しようとするその研究方法は、きわめて有用であり広く提唱されるべき価値を具えている」と述べる。吳涇は、「土神」に関する文献資料の少なさを補い、濱島の方法を活用するためには、聴取調査によって得られる口碑資料によって手がかりをつかむ必要があるが、その中に反映された「集団の記憶」としての民間故事・靈異説話の持つ社会的文化的意味を正確に読みとることが不可欠である

と主張する。

呉涪は、呉江市蘆墟鎮草里村の莊家廟について、明・弘治元年（一四八八）刊『呉江県志』、清・康熙二十四年（一六八五）刊『呉江県志』、乾隆十二年（一七四七）刊『呉江県志』、道光二十七年（一八四七）刊『分湖小識』、光緒年間抄本『江震両邑圩目冊』（呉江市図書館古籍部）、光緒八年（一八八二）刊『周莊鎮志』、『垂虹識小録』（同治三年「一八六四」の記載を含む）、及び新編『蘆墟鎮志』（二〇〇四年刊）等の記述を踏まえ、二〇〇五年八・九月に一五人の老人の聴取を行って、当該の廟、及びこの廟と周辺の村落・市鎮との関連を、一九四九年以前、及び一九四九年以降の衰落、及び文化大革命終了後から一九八〇年代を経て今日の復興に至る時期について考察し、かつ各時期の廟における信仰行事について生き生きと叙述している。

「1」「南北三草」と「莊家圩廟」では莊家圩廟の帰属をめぐる清末以降の歴史が丹念に追跡され、その中で一九四九年以前、草里村と孫家湾村の間で紛争のあったことが明らかにされ、村人たちの「歴史の記憶」の中では周辺村落との関係こそが重要であった、と指摘する。

「2」「猛将会」（莊家圩廟の神霊としての劉猛將軍の祭

祀）の組織と『出会』の経路」では、一九四九年以前を中心とする正月の猛将会の賑わいの有様が詳しく伝えられるとともに、「村落の廟宇に対して市鎮の廟宇が上位廟であることを示す『解錢糧』慣行は、莊家圩廟の猛将会では全く見られない。それどころか、莊家圩廟をはじめとする農村の廟宇は相当大きな自主性を保持しており、決して自らを都市の廟宇の下位に位置づけようとしたわけではなかった。」とする。

「3」「復興」の伝統」では、莊家圩廟が一九四九年以降、一九六二年の廟の取壊しを頂点とする衰退から、一九九〇年代以降、漁民の資金にも依拠しながら復興して来る過程が活写されるが、その手段の一つでもあった鎮所在の一寺廟―泗洲寺の草里村への移転と莊家圩廟への統合は、六〇〇年前の一四世紀に明朝が行った大寺院泗洲寺への小寺院の吸収を想起させ、逆方向ではあるが、「歴史は繰り返す」とされる。民間の土神の示すこの数百年間にもわたる適応力・生命力は、実は現在の農村で目にする各廟の劉猛將軍像の形姿がそれぞれに異なっていることにも具現している、とする。

呉涪は「おわりに」で「民衆の歴史の記憶を解することを通じて、これらの記憶に反映された社会関係が長い

歴史の過程の中でどのように蓄積され形成されてきたのかを理解すべきである」とする。適切な問題提起である。ただ、こうした「長い歴史」の中で、本書の追求している「清末民国期」、さらに「解放から文化大革命に至る時期」、及び「改革開放期」それぞれのもつ歴史的特質もまた追求されねばならないであろう。

四 佐藤仁史・太田出・稲田清一・呉滔編『中国農村の信仰と生活―太湖流域社会史口述記録集』（汲古書院、二〇〇八年十二月）について

第一部・解題論文篇、第二部・調査報告篇、第三部・口述記録篇からなり、合計四一〇頁にわたる本書『中国農村の信仰と生活―太湖流域社会史口述記録集』は、本稿で『太湖流域社会』という略称を用いている『太湖流域社会への歴史学的研究―地方文献と現地調査からのアプローチ』の単なる付篇ではない。独立した雄篇である。ただ、『太湖流域社会』と非常に緊密な連関をもつ著作であるため、あえて紙幅のない中で、ここに若干の文章を付すことにした。

本書は、佐藤仁史・太田出による序論に、『太湖流域

社会』の「姉妹編として口述記録の一部を出版公開することで、実証の根拠を提示すると同時に、調査の成果を研究者間で共有していこうとする目的を有している」と記された通りの構成と内容をもっている。

佐藤・太田の序論によれば、『太湖流域社会』に結実した本研究グループの当面の研究成果の基盤の一つとなった膨大な聴取調査の口述記録の中、本書第三部とした一群のものを選択・収載する上で留意したのは、本研究グループの聴取調査が「民間信仰や民俗という角度からみえてくる太湖流域における基層社会の実態」を対象として推進されてきたことであった。「信仰や民俗など文化的諸相に関する分析」は、決して軽視されてきたわけではないが、「相対的に不足しており、なお検討する余地が少なからず残されている」。研究グループは、こうした立場から、「近年の研究のうち、近世から近代にかけての江南農村の構造変容と民間信仰との関係について精緻な分析を加え」た濱島敦俊氏による「県―市鎮―社村」という「三層構造モデル」を常に参照・検討し、「民国期から現在にかけての劉猛將軍信仰を中心とする民間信仰の実態と変容」に着目して調査を進めた。その上で、①村落における劉猛將軍信仰の実態と変容、②村

レベル、市鎮レベル、県・市域レベルそれぞれの宗教職能者、③民間信仰や年中行事・人生儀礼に関する民俗と関わる宣卷芸人、④「水上の世界」の漁民の信仰組織に調査の重点を置いた。また、調査全体を通じて、明末以来の「伝統文化」の近代化の中での変容、近年における民俗文化の復興の実態の把握という問題関心を設定した。

第一部・解題論文篇に収載された三篇の文章は、読者による第三部・口述記録篇の内容理解を容易にするため、口述調査に直接参加した稲田清一が調査地呉江市の農村部における行政区画の変遷、佐藤仁史が呉江市大長浜村を中心とする村落構造の変容と民間信仰、また太田出が太湖流域漁民の信仰・漁撈・陸上定居への過程をそれぞれ執筆したものである。すなわち、稲田の「呉江県農村部における行政区と集落」、佐藤の「近現代江南の村落構造の変容と民間信仰」及び太田の「連家漁村から陸上定居へ」である。三篇のいずれもがいわゆる平板な「解説文」では全くなく、詳細に根拠を提示し、充実したモノグラフとなっている。しかもきわめて平明に叙述されている。そうした印象を与える理由は、一つには、いずれもが、民国期から一九四九年の中国革命を経て現在に至る対象の継起的变化を鮮明に描いていることにある。

また一つには、稲田・佐藤は土地改革と農業集団化を、太田は漁業における社会主義的改造をそれぞれ新たな資料や口述記録を活用しながら分析し、社会主義制度への移行過程とそのものもたらした結果が、試行的にはあるが、きわめて具体的に提示されていることにある。

なお、この三篇は、『太湖流域』における執筆者たちの各論稿紹介の末尾に付した筆者の拙い所感に対応する各執筆者の示唆的発言をも内包している。

第二部・調査報告篇は、呉江市蘆墟鎮在住の郷土史家で、現地調査に積極的に関わり、民間芸能関係において種々のアドバイスを行った張舫瀾氏が、一九八二年に執筆した呉江市蘆墟鎮莊家圩廟の猛将会に関する調査報告「劉猛将伝説と呉江莊家圩猛将会調査」の翻訳であり、当時の現地調査をふまえた豊富な内容をもつ。

第三部・口述記録篇は、佐藤仁史・太田出・呉滔の編集になる。聴取調査の対象としてこの口述記録に収載された人々は、筆者の整理によれば、合計三四名、編集者の分類法に従えば、うち一四名は農村の老幹部・農民、三名は市鎮の住民、一名は漁民・漁行、六名は民間信仰関係で、そのうち一名は廟の管理人、一名は仏娘、一名は宣卷芸人である。出生年代は、筆者の整理によれば、

一九〇〇及び一九一〇年代が三名、一九二〇年代が一名で最多、一九三〇年代が一〇名でこれに次ぎ、一九四〇年代が三名、一九五〇年代と六〇年代が各一名となっている。これらの人々の居住地は、いずれも呉江市内の鎮・村・漁業村であるが、主要には、北庫鎮大長港村、北庫鎮大長浜村、北庫鎮翁家港村、北庫鎮漁業村である。口述記録篇の編集方針で最も重要だとみなされるのは、聴取（ヒアリング）対象者、すなわちインフォーマントの口述を中国語で整理し、これを日本語には翻訳せず、そのまま中国語で出版・公開したことである。筆者の認識では、今回の調査に従事した研究グループのメンバーはいずれもが高いレベルをもつ普通語としての中国語話者である。したがってヒアリングは、現地方言を中国語（普通語）に翻訳する通訳を通して、中国語（普通語）→現地方言→インフォーマント→現地方言→中国語（普通語）という順序で行われた。本来は、ここで完結ということになる。しかしながら、日本人調査者は、あとで録音を聴いた際、現地方言では更に多くの情報が語られていることに気付き、現地方言部分をテープ起こしし、さらに中国語（普通語）による整理の段階では、ヒアリングの際のニュアンスを可能な限り留めることとした。

学界動向…中国史研究における実地調査の新たな展開

全てを日本語ではなく中国語のままで出版した理由の一つはこのことにあり、いま一つは、日本人以外にも、可能な限り多くの中国研究者に利用してもらうためであった。

ここでは、口述記録の個別の具体的内容に触れるゆとりはなく、またそのための筆者の閲読も不十分である。ただ、質問への回答の中で、インフォーマントたちによって、「日本人的時候」（二例）及び「日本人来的時候」（二例）という語句がごく自然に用いられていることは、日本人の一人としての筆者に深い印象を残した。

むすび

以上、『太湖流域社会』の各部分については比較的立ち入って、また『信仰と生活』については簡単ながら構成の特徴について説明してきた。その中で「清末民国期、江南デルタ市鎮社会の構造的變動の基礎的研究」と題して実施されてきた本共同研究の中心的方法、すなわち、本稿「はじめに」で触れたところの広い意味でのフィールドワークのもつ迫力については、ある程度感得していただけたのではないかと考えている。また、『太湖流域社会』の第Ⅰ部及び第Ⅱ部を構成している八篇の個別の

論稿に対しては、それぞれの文末に粗略な所感を述べてきた。以下では、両書に具現された本共同研究の全体としての成果と課題について、そのフィールドワークの特徴に立返りつつ、述べておきたい。

1 地方文献の発見―基層資料への注目

すでに本稿――でも言及したように、『太湖流域社会』における地方文献とは「地方新聞、地方檔案、郷土史料」であり、実際にはこれに「新編地方志」が付加されている。そして『太湖流域社会』は「あくまで地方文献の博搜、地方文献の新たな可能性の発見に重点を置いている」。こうした意識的な地方文献の調査は、これまで、例えば一九八八―八九年における筆者らの江南デルタ市鎮の調査では、調査項目の一つに「現在に至る郷鎮志の編纂・刊行状況」を掲げたものの、必ずしも中心課題として追求されてこなかった。今回は、山本論文における常熟市檔案館蔵の『常熟日日報』、陳来幸論文における蘇州市檔案館蔵の「蘇州総商会ファイル」、佐藤仁史論文における呉江市図書館蔵の『呉江県教育状況―県視学報告』、太田出論文における青浦県檔案館蔵の「徐涇鎮第四保・第五保戸口調査表」、稲田論文における青

浦県檔案館蔵の「青浦県余山郷／鎮地籍面積冊」と「青浦県余山郷地籍公佈図」など、個別研究の中で鍵鑰的位置を占める基本資料が、研究計画の基本理念に基づく意識的な文献調査活動の中で発見され、それぞれに新たな成果を生み出している。また、佐藤・稲田・太田について挙例した文献はいずれも定量的活用にも資するものであることを指摘しておきたい。

本共同研究における「地方文献」における「地方」とらえ方には注目すべき特徴がある。それは、調査対象となっている太湖流域社会の現場それ自体を重視しており、このため、所蔵機関の中でも地元のそれに最大限の注意を払っていることである。『太湖流域社会』第三部・地方文献情報編2「檔案館・図書館情報」で詳しい紹介がなされている一七の機関は、いずれも本共同研究において太湖流域社会と規定されている地域である蘇州市・呉中区(二〇〇一年二月設立:筆者)・呉江市・崑山市・嘉興市・青浦区・松江区・湖州市、及び隣接行政区の中でとりわけ図書・檔案・新聞類の豊富な常熟市に限定されている。また既に触れたように、太田の『太湖流域社会』序において、県・鎮政府地方志辦公室及び社区居民委员会文化站といった、地域社会への距離の近い

基層行政機関の史料編纂室への注意が喚起されていることもそうした姿勢を示している。また、『地方文献』の第三のジャンルとされている郷土史料においても、単に民間に私蔵されている族譜及び宝巻などの文字史料という範囲を超え、宝巻については師匠から弟子へと伝承され、今使用されている抄本が包含されており、またこうした宝巻を用いて現実に上演する宣卷芸人の上演記録としての「生意味表」（「工作表」）も対象となっている。このように、本共同研究における「地方文献」の「地方」とは、いわば社会の「基層」をも意味しているのである。さらに指摘しておきたいのは、これらの「地方文献」の使用に当たっては、例えば、青浦県の地籍台帳と地籍公布図について、これらの対象地域の住民の聴取調査を行い、その理解を飛躍的に深める結果が得られたように、「地方文献」の収集・分析と聴取調査との結合が意識的に実施されたことである。こうした結合は、『太湖流域社会』と『信仰と生活』の中で随処に見られる。

2 聴取対象者の拡がり―老百姓との交わり

重複を冒して述べることになるが、『太湖流域社会』序の太田の原文では、「我々はすでに呉江市で聴取調査

を開始しており、すでに（ママ）延べ人数にして一五〇名ほどから聴取を行った」とあり、「これまでの聴取により呉江市農村の概況を十分に把握するとともに、今後の本格的調査に向けて鎮政府や村委會（村民委員会：筆者）、村落住民との間に信頼関係を構築しえたと確信している」と述べられている。「呉江市農村」のこの一五〇名ほどの人びとが老農民（雇農・貧農・中農・富農、老漁民（船上生活者・漁業村幹部）、宣卷芸人をはじめ多様な構成をもっていることもすでに紹介した。佐藤仁史による『太湖流域社会』の結語によれば、研究グループは、「文献調査を開始した当初から」、「多様な『老百姓』の世界に入り込むような調査を自らも行いたいという淡い期待を抱いていた」とされるが、まさに「老百姓」―民衆の声を聴くことがその通りに実現したのである。これらの人びとは、『太湖流域社会』の太田の序によれば、調査に際して設定した「理論的仮説」に「依拠しながらも、現地協力者の意見に耳を傾けつつ臨機応変かつ柔軟に調査地や聴取対象者（インフォーマント）を選んだ方がよいであろう。」という考えに基づき、「大学研究者」に依存するのではなく、現地における知己を通じて自らが探し当てた人々であった。佐藤の結語によれ

ば、最初に現地協力者となったのは盛沢鎮在住の周德華氏(本稿二一²)、及び蘆墟鎮在住の張舫瀾氏(本稿四)という二名の郷土史家であり、聴取調査の具体的進行については、「かつて右派の家族とされ、進学や幹部への道を閉ざされ」ながら、「基層社会において現在では名望を得ている」北庫鎮大長浜村の楊前方氏とその子息楊申亮氏の協力を得ている。

現代中国社会の基層を生ききてきた多くの一般の人びと——老百姓からのこのような聴取を実現し、聴取に至る過程とその結果を可能な限り詳しく公表したこと自体が、本共同研究のかけがえのない成果であることを強調しておきたい。

3 民国と現代

本共同研究は、すでに触れたように、歴史的な対象としては、「明清時代につづく清末民国期」を扱うこと、「明清時代から清末民国期へと至る太湖流域社会の連続と断絶の両面を考え」ることを目的としている(『太湖流域社会』太田序)。これは「江南市鎮社会の研究は、明清期とりわけ商業化が顕著になった明末から清代に集中しており、これに比して清末民国期の研究は絶対的に

不足しているのが現状である」という認識に基づいていた(『太湖流域社会』佐藤仁史論文。本稿二一³)。研究グループは、『太湖流域社会』及び『信仰と生活』両書を出版した段階で、この目的をどのように実現したであろうか。先に本稿の「地方文献の発見―基層資料への注目」で挙げた、民国時代の資料に基づく『太湖流域社会』の五篇の研究に示されるように、鄉村行政、絲織工業、地域社会における教育活動、漁民社会の戸籍管理、農村における土地・徴税管理といったいくつかの側面における民国期の特徴は、太湖流域社会に即して、今回はじめて具体的に解明された。ただ、「清末民国期」、あるいは「民国期」とはいかなる時代なのか。たとえば、研究グループ内部からもすでに提示されているが、「国民国家による地域社会の掌握が王朝国家による地域社会の把握のあり方と如何なる共通点と差異を有していたか」(『太湖流域社会』佐藤仁史論文。本稿二一³)というような包括的視点による民国期の認識は、今後の課題として残されている。課題の解決のためには、今回の共同研究の所産である両著作に接した私たち自身が中華民国を近代の国民国家として明確に性格づけることについての議論を進めなければならない。またそのような議論は、

現代中国をどのように認識し、そのことをふまえて今を生きる自己を民国期の中国とどのようにつなぐかにも関わるのである。

4 農村と市鎮

『太湖流域社会』及び『信仰と生活』両書で、研究グループが濱島敦俊の提起した県社会―市鎮社会―社Ⅱ農村の世界という、明末以降の江南デルタ社会の重層的モデルについて、しばしば言及し、それを前提として考察を進めるのは、濱島が農村社会の商業化と民間信仰に関する自己の研究を基盤として、県、市鎮、農村それぞれのレベルの地域社会における共同性と相互間の系列化を包括する明晰な論理を提示したからである。⁽¹⁾

この点について、『太湖流域社会』では、佐藤仁史が「清末民国期江南地方の基層社会における統合の特質と変容過程」という課題を自らに提起し、地域社会における初等教育、新知識人層による平民教育、農村教育における私塾の三つの側面から、近代教育における市鎮と農村との非連続性や分断的な状況の出現を明らかにしている（本稿二―3）。佐藤はまた、改革開放政策以後、今日に至る民俗文化復興の一端としての宣卷に即した実態

分析から、少なくとも娯楽圏や信仰圏については、農村と市鎮との乖離が際立っているとしている（本稿三―2）。呉滔は、一九四九年以前の農村の廟宇の自主性の大きさからそれが都市（市鎮・県城）の下位に系列化されることはなかったとする（本稿三―3）。別に、太田出は、太湖流域漁民は、一九四九年以前の段階において社・会と呼ばれる組織を結成し、今に至っているが、これらは、現在ではほぼ純粋な信仰組織であり、経済的活動における共同性は認められないとする。太田は又、漁民と鎮民・農民との間に社会生活における共同性はなく（本稿二―4）、固定した土地・家屋をもたない漁民の結合のあり方と農民のそれとの間には差異があつて当然であるとする（本稿三―1）。

『太湖流域社会』において教育・信仰・芸能等に即して提示された市鎮と農村との非連続性や乖離をどのように理解するのか。市鎮と農村との間の社会統合や共同性のあり方については、今新たな総合的把握を可能にする方法的検討が必要とされているように思われる。この意味で今後の本共同研究がさらなる発展を遂げ、民国期及び現時点について認められた市鎮と農村との非連続や乖離の側面についての認識がより深められて、濱島の示唆

に富んだ見解との関連が明確になることを期待している。筆者について言えば、一九九二年、自身、「現代中国の農村部における都市集落の果たす役割とその直面する課題を、その歴史の中から導き出す」ことを目的として、太湖流域社会の一角を占める上海市朱家角鎮の一六世紀明代後半期から今日に至るまでの通史を記述することを試みた⁽¹²⁾。筆者は、農村との関連無しには都市的集落自身の歴史が成立し得ないとして、商業活動に注目しつつ市鎮と農村とを結びつけ、市鎮をめぐる地域社会の形成と展開を跡づけることを企図していた。しかしながら、地理学者小島泰雄から、「農村性の解明についても一歩を進めることが今後の課題」であるとの指摘を受けたまま今に至っている⁽¹³⁾。筆者の研究の停頓は、一つには、地方文献の収集や聴取調査の立ち遅れに基づくものであり、『太湖流域社会』及び『信仰と生活』の成果によって改めてこのことを自覚させられた。いま一つには、市鎮と農村との間の社会統合や共同性のあり方を明らかにする筆者自らの視点や方法の未熟によるものである。行政体・市鎮・農村を包括する地域社会において、共同の利害に立ち向かう構成員の協力の実現形態としての秩序がどのように形成され、維持されていくのか。地域社会の

存立の基本に関わる問題を歴史の場に即して問うていなかったのである。今後、可能な形で取組んでいきたい。

最後に、両書に結実した共同研究について、ぜひ二つのことを記しておきたい。それぞれの口絵の目を瞭るような新鮮さと美しさがこのたびのフィールドワークにおける地域社会との接近の深さを物語っていること、及び全篇にわたる情報開示への行きとどいた配慮が研究グループのもつ国内外の研究の共同性向上への真摯な渴望を示していることである。

註

- (1) 濱島敦俊・片山剛・高橋正『華中・南デルタ農村実地調査報告書』(『大阪大学文学部紀要』第三四卷、一九九四年)
- (2) 森正夫編『江南デルタ市鎮研究』(名古屋大学出版会、一九九二年)
- (3) 『歴史評論』六六三号、二〇〇五年
- (4) 費孝通及び福武の研究とその影響については、注(7)の拙稿参照。林惠海『中支江南農村社会制度研究』上卷(有斐閣、一九五三年)。劉大鈞『吳興農村経済』(中国经济統計研究所、一九三九年)。
- (5) 太田出「清代江南デルタ社会と犯罪取締の変遷」労働

力の流入、犯罪、そして暴力装置」(岩井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』、京都大学人文科学研究所、二〇〇四年)

(6) 笹川裕史「中華民国期農村土地行政史の研究―国家―農村社会間関係の構造と変容―」(汲古書院、二〇〇二年)

(7) 夏井春喜『中国近代江南の地主制研究』(汲古書院、二〇〇一年)。同書序章「本書の方法と内容」に、日本の明清史研究における魚鱗図冊の調査・研究の概略を記す。

(8) 森正夫「一九三〇・四〇年代の上海平原農村における宅地所有について」(『名古屋大学文学部研究論集』一一三・史学三八、一九九三年。後、『森正夫明清史論集』第一卷、汲古書院、二〇〇六年に所収)。

(9) 筆者のフィールドワークについての考え方は、拙稿「フィールドワークと歴史研究」(『東方学のフロンティア―連続公開シンポジウム「廿一世紀の東方学」第一回―」(『京都大学人文科学研究所、二〇〇一年。後、『森正夫明清史論集』第三卷、汲古書院、二〇〇六年に所収)に述べるところがあった。

(10) 佐藤仁史・太田出「太湖流域社会史現地調査報告―外国史研究者とフィールドワーク―」(『近代中国研究彙報』三〇号、二〇〇八年)

(11) 濱島敦俊『総管信仰―近世江南農村社会と民間信仰』(研文出版、二〇〇一年)

(12) 森正夫「朱家角鎮略史」(森正夫編『江南デルタ市鎮研究』前掲)

(13) 小島泰雄「批評・紹介 森正夫編『江南デルタ市鎮研究―歴史学と地理学からの接近―』」(『東洋史研究』五二二卷三号、一九九三年)